

（参考文献）

- 伊藤瑞叡 [2007] 『法華経成立論史』, 東京: 平楽寺書店.
- 植木雅俊 [2008] 『梵漢対照・現代語訳 法華経 上』, 東京: 岩波書店.
- 勝呂信静 [1993] 『法華経の成立と思想』, 東京: 大東出版.
- 下田正弘 [2011] 『シリーズ大乘仏教 第二巻 大乘仏教の誕生』, 東京: 春秋社
- 塚本啓祥・多田孝正・池田魯参
[2009] 『傍訳 法華三部経全書 第二巻』, 東京: 四季社.
- 中村瑞隆 [1978] Dam pañi chos pad ma dkar po shes bya ba theg pa chen poñi mdo (3), 『法華文化研究』 4, 100-120.
- 布施浩岳 [1967] 『法華経成立史』, 東京: 大東出版.
- 松壽誠廉・長尾雅人・丹治昭義
[2001] 『大乘仏典 4 法華経 I』, 東京: 中央公論新社.
- Kern, J. [1884] *The Saddharmapundarika or the Lotus of the True Law*, Oxford.
- Suzuki, T.
[2015] Two Parables on “The Wealthy Father and the Poor Son” in the *Saddharmapuñḍarīka* and the *Mahābherīsūtra*, *Journal of Indian and Buddhist Studies* 136, 169-176.

勝呂説：長行で述べ足りなかったために、偈で加上した。

終章

以上見てきたように、『法華経』にある一つの事象は、自らの信じる説における肯定的根拠にも、否定的根拠にも用いることができる。固定観念や先入観に従って事象を見ていくのではなく、ひたすら丹念に調べていく作業を通してしか、この状況から抜け出す方法は無いものと思われる。発表者は、仏教学研究者の末席に坐す者として、そして同時に『法華経』を信仰する、日蓮聖人門下の教師として、理性と情熱を持ってこの課題に取り組んでいきたいと考えている。

〈略号および使用テキスト〉

- SP *Saddharmapuṇḍarīka*. (『法華経』)
- SPs *Saddharmapuṇḍarīka*, ed. H. Kern and B. Nanjio, St. Petersburg, 1908-1912.
- SPt Tibetan version of the SP.P no. 781 (Dom pa'i chos pad ma dkar po).
- SPc2 Second Chinese Version of the SP, T. No. 262. (『妙法蓮華経』七卷、鳩摩羅什訳)
- T. 『大正新脩大藏経』.

脈であることがわかる。偈頌先行であるならば、当初の『法華經』には存在していなかったことになってしまい、偈頌先行が疑われる資料といえる。

- ・ 下線部②のみ単数形であり、偈におけるその他の動詞は複数形である。

※ 両説の立場からみた資料

布施説：この重要な文脈は、第一期に作成された法華經に説かれることはなく、第二期において新たに追加した教義である。

勝呂説：長行に続いて偈を作成する流れで『法華經』は作成された。欠かすことが出来ない重要な所説であるために、長行で詳しく述べた。偈は信者向けにも機能することから、難しい教義は省略して、偈では再説されなかった。

資料2 長者窮子喩 冒頭

<p>A-2 長行訳²⁰ たとえば、世尊よ、ある男が父親のそばから離れていったとしましょう。</p>	<p>B-2 偈頌訳²¹ たどえていえば、(ある) 愚かな男が <u>① (ほかの) 愚かな人にそそのかされたようなものです。</u></p>
--	--

- ・ 資料2は、偈にしかない所説がある資料である。下線部①によって、息子が父のもとを離れた理由は、「他人にそそのかされたから」と述べられる。この理由は偈にのみ存在しており、長行だけでは分からない。

※ 両説の立場から見た資料

布施説：すでに偈で述べたために、長行で再説しなかった。

20 tad yathāpi nāma bhagavan kaścīd eva puruṣaḥ piturantikād apakrāmet (SPs 101.11, SPt 45b8-46a1, SPc2 16b25-16b26)

21 yathāpi bālaḥ puruṣo bhaveta utplāvīto bālajanena santah/ (SPs 111.1, SPt 50a8-50b1, SPc2 17c13-17c14)

で毫碌しているからです。

それゆえ世尊よ、私たちは他の菩薩たちを無上正等覚に向けて教え導いてきましたが、世尊よ、しかしながら我々にこれを得たいという心が起こったことは一度もありませんでした。

世尊よ、このような我々が今、世尊の面前で、諸々の声聞たちにも無上正等覚の授記があるとお聞きし、希有であり、未曾有であるという思いを得て、大きな利得を得ました。世尊よ、本日も思いがけず、この様な今まで聞いたことのない如来のお言葉を聞いて、立派な宝を得ました。世尊よ、計り知れない宝を得たのです。世尊よ、探すこともなく、求めることもなく、考えることもなく、望むこともなかった私たちは、世尊よ、宝を得たのです。私達には明らかになっています。世尊よ、善逝よ、私達には明らかになっています。」

お声を聞いて驚異の念を抱き、希有な思いとなり、大きな喜びを得ました。

このように今、私たちは突然、指導者の心地よい声を聞いたのです。非常に優れた宝からなる大量の集積を今日、一瞬のあいだに②私は得ました。かつて一度もそれを考えることもなく、求めたこともないもので、それを聞いて私たちは皆、驚異の念をいただきました。

- ・資料1は、長行にしかない所説がある資料である。下線部①は、四人の尊者達が、無上正等覚を求めなかった理由は、「すでに解脱しているから」と「毫碌していて残りの時間が無いから」とであると述べる。

Suzuki [2015] 170-171によれば、『法華経』は、“解脱したものは二度と解脱できない”という従来の「常識、前提」を乗り越えることに挑戦した。そして『法華経』は、「輪廻からの離脱は真の解脱ではない」、「三界を離脱しても不死ではなく再生する」という説に至り、これによって阿羅漢の成仏は保証されたという。

ここから下線部①は、『法華経』にとって欠かすことのできない重要な文

み、関節も副関節も痛んでまいります。それゆえ我々は世尊よ、世尊が教えを説かれ“一切は空であり、無相であり、無願である”ということが明らかになりましたが、これらのブッダの特性についても、ブッダの国土の莊嚴についても、菩薩の自在な遊戯についても、如来の自在な遊戯についても、切望することはありませんでした。

①それはなぜかと申しますと、世尊よ、私たちはすでに三界を出離し、涅槃を得たと思っておりましたし、老齡

- 18 *vayaṃ hi bhagavañ jīrṇā vṛddhā mahallakā asmin bhikṣusaṃghe sthavirusaṃmatā jarā jīrṇībhūtā nirvāṇapṛāptāḥ sma iti bhagavan nirudyamā anuttarāyāṃ samyaksambodhāv apratibalāḥ smāprativīryārambhāḥ sma/ yadāpi bhagavān dharmam deśayati ciraṃ niṣaṇṇā ca bhagavān bhavati vayaṃ ca tasyāṃ dharmadeśanāyāṃ pratyupasthitā bhavāmaḥ/ tadāpy asmākaṃ bhagavan ciraṃ niṣaṇṇānāṃ bhagavantam ciraṃ paryupāsītānāṃ aṅgapratyaṅgāni duḥkhanti saṃdhivisaṃdhayaś ca duḥkhanti/ tato vayaṃ bhagavan bhagavato dharmam deśayamānasya śūnyatānimittāpraṇihitaṃ sarvaṃ āviṣkurmo nāsmābhireṣu buddhadharmeṣu buddhakṣetravyūheṣu vā bodhisattvavikrīḍiteṣu vā tathāgatavikrīḍiteṣu vā sprhotpādītā/ tat kasya hetoḥ/ yac cāsmād bhagavaṃs traidhātukān nirdhāvitā nirvāṇasaṃjñīno vayaṃ ca jarājīrṇāḥ/ tato bhagavann asmābhir apy anye bodhisattvā avavaditā abhūvann anuttarāyāṃ samyaksambodhāv anuśiṣṭāś ca na ca bhagavaṃs tatrāsmābhir ekam api sprhācittam utpāditaṃ abhūt/ te vayaṃ bhagavann etarhi bhagavato `ntikāc śrāvakaṅām api vyākaraṇam anuttarāyāṃ samyaksambodhau bhavatīti śrutvāścaryādbhutapṛāptā mahālābhapṛāptāḥ sma bhagavann adya sahasaivemam evaṃrūpam aśrutapūrvam tathāgataghoṣam śrutvā mahāratnapratilabdhaś ca sma bhagavann aprameyaratnapratilabdhaśca sma bhagavann amārgitam aparyeṣṭam acintitam aprārthitaṃ cāsmābhir bhagavann idam evaṃrūpam mahāratnaṃ pratilabdham/ pratibhāti no bhagavan pratibhāti naḥ sugata// (SPs 100.7-101.10, SPT 45a2-45b8, SPc2 16b13-16b24)*
- 19 *āścaryabhūtā sma tathādbhutaś ca aubilyapṛāptā sma śruṇitva ghoṣam/ sahasaiva asmābhir ayaṃ tathādyā manoḥjāghoṣaḥ śrutu nāyakasya// viśiṣṭaratnāna mahantarāśir muhūrtamātreṇāyam adya labdhaḥ/ na cintito nāpi kadāci prārthitaṃ tam śrutva āścaryagatā sma sarve// (SPs 110.12-15, SPT 50a6-50a8, SPc2 17c11-17c13)*

一類に属し、偈が短く、長行が長いという伝統的なインド典籍のありかた¹⁶に則っている、信解品から見ていくこととする。

第三章 資料の一例

資料は、内容によって細かく区切り、長行と偈が対比できる形式とし、訳文を加えた¹⁷。今後、このような資料を蓄積し、『法華経』の全ての長行と偈の対照表を作成していく。

本発表で紹介する二資料に限り、「※両説の立場からみた資料」という欄を設けた。これは両説の立場に則して資料を見ると、どのような解釈が可能かを示すものである。それぞれの解釈が可能であるという曖昧さを通し、上述の研究方法を取る必要性が再確認された。

資料1 信解品長行 冒頭部分

<p>A-1 長行訳¹⁸</p> <p>「世尊よ、私たちは実に、齢を重ね、年老いており、この比丘サンガにおいて長老とみなされております。老齢であり衰えてしまい、すでに涅槃を得たと（思っていたために）、世尊よ、無上正等覚に向かって怠惰であり、向かう力もなければ、立ち向かうこともありませんでした。</p> <p>世尊が教えを説かれる時、世尊は長い間座っておられます。そして我々もその説法に列座しております。世尊よ、長い間座り、長い間世尊にお仕えしておりますと、私たちの身体や手足は痛</p>	<p>B-1 偈頌訳¹⁹</p>
---	-----------------------------

16 ケルン [1884] XVIIIを参照した。

17 植木 [2008]、松濤・長尾・丹治 [2001]、中村 [1978]、塚本・多田・池田 [2009] を参照した。

ち教团的要素が皆無の状況にあつて、ひとびとのもとに導入され、ひとびとに経験せしめられたもの、それは書写された經典であつた。（中略）

經典創出運動としてはじまった大乘仏教は、やがて外部世界に影響を与え、外界を変容しはじめる。アサンガやヴァスバンドゥをはじめとする論師たちのテキストに大乘經典がその存在をあらわし、寄進の碑文に大乘の信奉者たちが名を列ね、観音をはじめとする礼拝像が出現をする紀元五、六世紀に、それは顕在化してくる。経蔵を担うものたちの一部に起こつた純粋なテキスト制作運動としての大乘は時代を経て外化されるのであり、この事態を大乘仏教の教団史的解明という観点からとらえるなら、大乘教団が大乘經典を生み出したのではなく、大乘經典が大乘教団を生み出したことになる。

布施説・勝呂説の両説は、“すでに実在している大乘教団が新たに作成した經典が、大乘經典である”という従來の認識を離れることなく、それぞれの説を展開している。法華經成立論を暗礁に乗り上げさせてしまった根底には、この従來の認識があつたのかもしれない。大乘經典成立に関する新たな仮説が示された今、われわれはこの仮説の検証を含め、もう一度原点に立ち返る必要性が生じたといえよう。

発表者は、下田説が示した新たな前提の上に立ち、先行研究が行つてきた長行と偈の関係をみていくという手法は継承しつつ、『法華經』の文言を一つ一つ丹念にみていくことで、『法華經』の成立過程を再考察していきたいと考える。この方法によって研究を進めていくことで、『法華經』を通した下田説の検証を同時に行つていきたい。

研究に着手するに当たり、日蓮宗僧侶にとって最もなじみ深い寿量品から取り上げようかとも考えた。しかしながら、寿量品は布施説・勝呂説の両説において、長行と偈が同時成立であるという立場に立っている。そのため、寿量品を見ていても、両説を乗り越えることはできない。そこで、布施説における第

以上、対比する形式で両説を紹介した。

第二章 研究の方法

布施説・勝呂説の両説を通して見えてきたことがある。それは、『法華経』にある一つの事象は、それぞれの説にとって肯定的な根拠にも、否定的な根拠にもなり得ることである。布施説の根拠とされた幾つかの点は、逆に勝呂説の根拠にもなっていた。このような曖昧さが露呈したことによって、『法華経』の成立説は結論が出ない暗礁に乗り上げたといえる。

ところが近年、『法華経』を含めた大乘経典の成立に対して、新たな見解(仮説)が提示された。下田 [2011] 38は、「大乘教団が大乘経典を生み出したのではなく、大乘経典が大乘教団を生み出した」(以下、下田説)と述べる。これは従来の学界理解とは正反対の理解となる。下田 [2011] 48-62は、この仮説について以下のように述べている。

従来の研究は、大乘経典には作者、編纂者、担い手が存在し、かれらが経典を生み出したという前提に立って、経典の作者あるいは編者の教団をテキストの外に確定しようと試みてきた。至極まっとうにおもえるこの方法は、だが古代インドの歴史的事実にはどうしてもうまく照合しえず、説明が容易に進まない。確認される事態はむしろ反対であって、ショペンがあくことなく論じつづけたように、最初期にはテキストの存在のみが認められ、その影響が時代を下って碑文にあらわれ、寺院建設にあらわれ、仏教美術にあらわれ、教団の実態を可視化させはじめる。この順序にしたがってすなおに説明を施すなら、テキストは外界を変容させていったのであり、外界をそのまま反映しているのではない。(中略)

あらためていうまでもなく、中国であれ、朝鮮であれ、日本であれ、東アジアにおいて、そもそも大乘教団は存在しなかった。それどころか、そこには仏教もなければ、その出現の背景の古代インド世界もない。すなわ

布施説（C）

『法華経』には決定的な齟齬が幾つか存在している。例えば三界火宅の譬喩は、長行では長者が家中にいる時に火事となり、偈では屋外にいる時に火事になるという齟齬がある。この齟齬は決定的なものであり、段階成立でなければ起こり得ない齟齬である。

（C）に対する勝呂説

この種の説話は、教義・信条・教訓等を伝えることが目的であり、事件を逐一伝えるのが目的ではない。本来の目的が達せられれば、記事の厳密さは問題とするところではないというのが『法華経』編纂者の立場だったのではないか。それをもつただちに成立時代の違いを反映したものと解することは妥当ではない。

この他の齟齬を挙げれば、方便品・五百弟子品では場面設定として述べられた長行の内容が、偈では会話の中に組み込まれていることや、序品の長行では弥勒の心中で考えた内容が、偈の会話に組み込まれていることがある。しかしこれらの齟齬は、長行と偈が同時に作成されたのであれば自然と起こり得ることである。

ではなぜ、『法華経』が長行と偈を多様に組み合わせる叙述形式をとったのかといえ、第一には、長行の所説を再び偈で繰り返すことにより、発展的な所説を展開できることである。この意味では、偈は長行の叙述の結論に当たるといえる。第二には、長行と偈とは異なる読者を対象としていることが考えられる。おそらく偈はその部分だけを抜き出して信者に唱えさせるという目的があったのではないかと思う。一般的に見て、『法華経』は長行よりも偈の方に、仏陀の人格に対する帰依・讃仰の念が一層鮮明に表明されていることから、偈が教団の上層部の指導者に対するものであるよりも一般信者向けのものであるということが出来る¹⁵。

15 勝呂 [1993] 113-118, 122-123, 127を参照した。

また偈は、釈尊と仏弟子の会話であり、対話である。その対話が、物語全体のどの場面に位置するのか、偈だけでは分からない。偈頌先行には論理的に難点があり、同時成立でなければ意味が通じない¹²。

布施説（B）

上述したように、第一類と第二類には幾つかの相違点があり、説かれている素材や要素には新古の層が見られる。これらのことから、『法華経』は時代を経て成立したと考えられ、第一類と第二類には成立時代の差が生じているといえる¹³。

（B）に対する勝呂説

布教文学である経典は、教化の相手を意識して作成されるものであり、異なる読者を対象とした時、説き方を異にすることは当然である。我々には齟齬があるように思えても、ただ我々の読みが浅いだけであることや、実践・信仰思想では統一されていることもある。

新古の層についても、単に『法華経』が古い素材や要素を用いて作成されたことも考えられる。そのため、素材や要素の示す時代と『法華経』の成立年代は切り離して考えるべきである。物語が進展していくことで主題が転換し、作者の関心事も推移することで、使われる素材や要素が変化していくことも十分に考慮しなければならない。こうして現れる齟齬を以って、成立時代の異なりとすることは妥当ではない。さらに、『法華経』が段階成立したのであれば、段階的な『法華経』の流布の形跡が残っているはずである。しかし、そのような『法華経』は確認されていない¹⁴。

12 勝呂 [1993] 98-107, 110-111を参照した。

13 布施 [1967] 140-199を参照した。

14 勝呂 [1993] 22, 33-40, 49-52, 147-154を参照した。

べる。

1-2. 勝呂説の概要⁸

勝呂説が示された時、『法華経』の段階成立は定説化されていた⁹。勝呂説は、この段階成立説に疑問を抱き、「法華経は提婆品を除く二十七品がほぼ一時期において成立した」という新たな仮説を提示した。「一時期」という表現は、数十年という期間を指しており、二十七品が順番に、一品一品積み重ねられるように形成された。

1-3. 布施説と勝呂説

以下、布施説と勝呂説を対比させる形式で、さらに両説を紹介していく。

布施説（A）

第一類は重頌を主とし、第二類は完全な重頌ではない（以下、不重頌）、ここから第一類は偈頌先行であり、第二類は長行・偈頌が同時に成立した¹⁰。

（A）に対する勝呂説

『法華経』全体で対応関係を掴むために、「法華経長行・偈頌対比分表」¹¹を作成する。この表は、重頌・不重頌の度合いを数量化し、表にまとめたものである。重頌・不重頌の区別は必ずしもテキストに明記されていないため、内容による判断をせざるを得ない。この表によると、第一類に限らず『法華経』全般においては重頌が主であり、これに不重頌が合わせ用いられている形式といえる。不重頌は、やや第二類の方が多いが、時代差を想定させるほど決定的な差は両者にはない。

8 勝呂 [1993] を参照した。

9 勝呂 [1993] 97を参照した。

10 布施 [1967] 131-137を参照した。

11 勝呂 [1993] 100-106を参照した。

布施説は、長行と偈の対応関係を検討し、両者における譬喩などの内容を比較し、各品相互の関係、連絡や組織を考察することでこのように三つに分類している。

次に、布施説が述べる四つの時期（四期）を示すと以下のようになる⁶。

- 第一期：第一類の偈頌の成立（紀元前一世紀）
- 第二期：第一類の長行の成立（紀元後一世紀）
- 第三期：第二類の長行・偈頌の成立（紀元後百年前後）
- 第四期：第三類の成立（紀元後百五十年前後）

このように分けた理由を以下のように述べている。

- ・第一類は完全な重頌であることから、ケルン説⁷に従って偈頌先行である。
- ・第二類は完全な重頌とは言えないために、同時成立でなければならない。
- ・第一類と第二類の相違点には、①六道説と十界羅列説の相違、②書写の有無、③信解品の二十年と涌出品の四十余年の矛盾、④ストゥパ崇拜とチャイティヤ崇拜の関係、が挙げられ、明らかなこの相違は、歴史的に段階を経て成立したことを意味する。
- ・第三類の薬王品には、「我滅度後 五百歳」とあることから、第三類は紀元後百五十年前後と推定される。

以上の理由により、布施説は『法華経』が歴史的に段階を経て成立したと述

5 重頌であるのは序品一人記品に加え、安樂品、涌出品、分別品、隨喜品、法師功德品の五品がある。法師品は人記品までの流通文と見なされてきたが、関係を示す語句がなく、隨喜品が適当であり、元来は人記品の次に隨喜品があった。隨喜品を除く四品は思想内容から第二類の六品と切り離すことはできない。（布施 [1967] 119-126を参照した。）

6 布施 [1967] 127-215を参照した。

7 ケルン [1884] XVIIIは偈頌先行を述べた。

第一章 先行研究の紹介

伊藤 [2007] は、法華経成立に関する二十八の仮説を紹介している。成立説は「段階成立説」と「同時成立説」に大別され、前者の代表が布施浩岳博士の「三類構成四期成立説」（以下、布施説）、後者の代表が勝呂信静博士の「二十七品同時成立説」（以下、勝呂説）である。長行と偈の関係を中心に、以下にこの代表的な二つの先行研究について紹介する。

1-1. 布施説の概要³

布施説は、段階成立説の中で古典的標準と見なされており、現在でも多くの支持を受け、法華経成立の研究に大きな影響を及ぼした。『法華経』を三類に分類し、成立時代は四つの時期に分けられるとする。三類構成についてまとめると以下のようなになる⁴。

表 1

第一類（十品）	第二類（十品）	第三類（七品）
1 序品	10 法師品	22 嘱累品
2 方便品	11 宝塔品	23 薬王品
3 譬喩品	13 勸持品	24 妙音品
4 信解品	14 安樂行品	25 普門品
5 薬草喩品	15 涌出品	26 陀羅尼品
6 授記品	16 寿量品	27 妙莊嚴王品
7 化城喩品	17 分別功德品	28 普賢品
8 五百弟子品	19 法師功德品	
9 人記品	20 不軽品	
18 随喜品 ⁵	21 神力品	

3 布施 [1967] を参照した。

4 布施 [1967] 21-126を参照した。

研究ノート

信解品にみる長行と偈の関係

—— 法華経成立論の再考に向けて ——

吉 木 祥 介

目 次

序	第三章 資料の一例
第一章 先行研究の紹介	終章
1-1. 布施説の概要	〈略号および使用テキスト〉
1-2. 勝呂説の概要	(参考文献)
1-3. 布施説と勝呂説	注
第二章 研究の方法	

序

インドにおいて成立した『法華経』は、成立に関して未解決の問題を抱えている。「法華経成立史」・「法華経成立論史」という研究分野が存在することからも、今まで多くの研究者の関心を集めてきたことが窺える¹。ところが近年、『法華経』を含めた大乘経典の成立に関し、新しい見方（仮説）が提示された²ことで、これまでの法華経成立論を、従来とは大きく異なった角度から再考する可能性と必然性が生じてきた。本研究は以上のような背景の元に、『法華経』の成立（形成）過程を再考察していくことを目的とする。

1 詳しくは第一章で紹介する。

2 本研究第二章参照。